

青梅1980

dantesdaiji

A面

ダイジ「まず第一に、俺たち人間が、何か一つでもうまい手があるかどうか、考えてみることにしよう。ほんの一つでもいい。何かうまい手があるだろうか。

俺たちの世代っていうのは、何でもマスコミに乗せられた世代だ。そしてこの西洋文明っていうのは、ほとんどマスコミがなければ何もない。いつも色々な価値を一生懸命、音楽でも、テレビでも、映画でも、雑誌でも、いろんな素敵なことが書いてある。グアム島に行けば最高だとか。でも、言ってる本人はちっとも最高だなんて思っちゃいない。何しろ何度もグアム島に行って、どっちらけだからね。そう言わなければ商売が成り立たない。

あるいは人は言う、神秘体験を得ればとても素敵だ、あるいは内的なエネルギーに満ちればとても素敵だ、あるいは人は言う、セックスの恍惚境に入ればとても素敵だ。うーん？ なんかうまい手があると思ってる。

たとえば、いろんなロックスターがすごく調子に乗ってやっている。だけど、スターっていうのがね、本当にスーパースターになればなるほど哀れだっていうのを、そろそろ気がついてもいい頃だ。何一つ、つかまえることはできない。何一つ、確かに自分のものとしておくことはできない。確かに一時的な快感はある。だけど、2年か3年経ったら、全然そんなものが自分の欲求不満を解決していないことが分かる。全然。

一体人は何を求めているんだ？ 何を？ 何を本当に求めているんだ？ いろんなものに情熱をかける。そして人は、あれがいいという。マスコミはあれがいいという。一生懸命追いかける。行き着いた人間もそれらしく、俺は最高の音楽家だ、最高だっていう顔をしなくちゃいけない。ちょっと昔だったら英雄だ。俺は英雄だ！ ってこんなことやってる。そんな英雄に限って、ひとりぼっちになるとね、電気を消さないでくれ、ひとりぼっちにしないでくれ！

人間がある一つの線を、本当に厳しくて本当に神になるその一線を超えない限りね、人はどんなにその外見をつくらっても、その内面は3歳の幼子と同じだ。それくらい頼りない。考えてほしい。定力、エネルギーに満ちた状態、何かエネルギーに満ちて、自由で、奔放で、それにとっても憧れている。全然頭でもって滞ることがない、どしどし生ける。人と直面しても、楽々と人をこなすことができる。帝王だ。が、それがサトシの苦しみの原因だっていうことに、もういい加減気が付いた方がいい。」

(女性)「私には何かありますか？」

ダイジ「楽しみなさい。喜びなさい。今で完璧だ。サトシは男だからね、あっち行ったりこっち行ったりする。君も女だけど、現代文明に染まってるからね、やっぱりあっち行ったりこっち行ったりする。だけど、君の方がずっと楽だ。その楽であることを楽しみなさい。いいんだ、それで。」

ダイジ「人は、俺たちは、どうして一人きりになるのをそんなに怖がっているんだ？ 一人きりになると、空虚であることがいよいよはっきりしてくる。そして、それでいて今度は外でいろんな人と付き合うとかいろんなことをやってみる。そのときはいい。上手くいっている。だけど、今度は人さえ恐れる。同じ原因だ。

だって君たちはとにかく俺は空虚じゃないってことをあくまでも頑張らなくちゃいけない。ただ一つも例外はない！ ただ一つも例外はない！ この世に例外なんてただ一つもありやしない。だからこそ愛があるんだ！ 自分だけ違うとか、自分だけ完璧だ、そんなことはない。そんなバカなことはない。そして一生懸命抜け駆けすることを頑張ってる。だから余計に人を怖がる。何しろ抜け駆けしたような様子を見せても、自分の内面じゃちっとも本当は全然優越してないこ

とを知ってるからさ。」

ダイジ「うーん、君たちはね、たった一回きり今を生きている。ああ、とても軽い言葉だ。なぜかっていうとね、あまりにも単純すぎるからピンと来ない。これを見れども見ず、これを聞けども聞かず。あまりにも単純すぎるんだ。君たちは死ぬ。たった一回きり今を生きている。そして、もちろん転生するっていうことはあるよ。でも、転生したものはもう君たちではない。今日の君たちと明日の君たちとは全然違う。」

ダイジ「澄み渡った一生懸命さと、そしてリラックス。誤解しないでほしい、澄み渡った一生懸命さとリラックスは別のものじゃない。それを分けるからリラックスが台無しになってしまう。」

ダイジ「そう、冥想には二つの方向がある。一つは完全に自分が消えて、初めて生き始めるという、そういう冥想だ。いや、もうすでに完璧に生きていたことに気付く冥想だ。それはもう冥想ともいえない。そしてもう一つある。それは、何らかの形で自我が安定する場所を発見することだ。一人の本当に愛せる恋人に出会う。そのために死んでもいいと思う。それが一生の間、いや永遠に続くとしたら、それは一つの答えだ。一つの間。音楽家が音楽に自分のすべてを懸ける。それは決して宇宙とか悟りとかいうものではない。でも、それに会ったとき、その人は本当に楽々と自分の人生を楽しむことができる。もちろん苦しみも悩みもある。が、その苦しみや悩みはすべて肯定的なものだ。なぜなら人間は、何かに自分を懸けたいと思っている。それくらい嫌気がさしてるんだ。人間の本質っていうのはね、自我の人間の本質っていうのはね、もし憎しみという言葉を使うとすれば、憎むその対象は自分自身以外にない。自分を一番嫌っている。じゃあ、その辺の酒屋さんとか何とかっていうのは、のほほんと生きてるじゃないかっていうかもしれない。それはね、一つのバランスに達したんだ。それは自我が消えたんじゃない。完全に自由じゃない。それは片隅の幸福だ。でもそれはバランスがとても取れている。文句ない。目を閉じて、サトシ。比較するんじゃない。自分と何かと比較してはいけない。サトシは一回きりのサトシだ。永遠に永遠に永遠に永遠に、サトシが生きた、その生きたものは二度と帰らない。宇宙は始まり、宇宙は終わる。地球は始まり、地球は終わる。永遠が始まり、永遠が終わる。だが今のサトシは二度と、二度と、二度と戻って来やしない。同じサトシは二度とありえない。たった一回きりのサトシだ。そしてそれはすべての人々に言える。いいや、すべての命に言える。すべての。そんなことが頭で分かったって何の意味もない。が、今君たちのハートに俺の声が流れている。そうするとそこから、新たな希望が、新たなエネルギーが、かすかに、かすかに育ち始める。もう一度言おう。永遠に永遠に永遠に永遠に、今あるあなたたちを、繰り返す道はない。無限の時間が経ったとしても、君たちはもう一度出てくることなんかないんだ。たった一回きりなんだ。たった一回きりなんだ。だからこそ勇気が出てくる。だからこそ愛が出てくる。そして、誤解しないでもらいたい。社会的にうまくやったり、社会的に繁栄したり、社会的に地位を得た人が何かうまく行ったなどと思わないこと。そんなもの錯覚にすぎない。人間は、自分の自我の全体っていうものを、直面したとき、はじめて生き始める。それ以外は、どんなに上っ面を整えたとしてもね、それは、いつも自分に嘘をついてるんじゃないか、いつも本当に生きてるんじゃないんじゃないかと思いつけてるだけだ。ただそれを、とても深い所に抑圧している。もし君たちが何か素敵なものを、何かうまい手があると思ったら、その方向に向かって全努力をするべきだ。そしてその喜びと苦しみのごとくを味わうべきだ。そしたら分かるだろう。人間である限り、何をやったとしても、何一つ例外がないことを。君たちはあまりにも、マスコミが作り出した、外部が作り出した価値観を信奉しすぎたために、自分たちを弱く見すぎる。本当は誰でも同じ問題にいるんだ。誰でも同じところにいるんだ。ただ違いがあるとしたら一つだけ、それ

は自我が、自分が何とかうまくやろうとする立場が迷い、そう本当は迷いでさえないのだが、迷いだと気づくことなんだ。その時初めて君たちは生き始める。そしてそれが冥想なんだ。永遠に永遠に、二度と今いる君たちってというのは繰り返すわけにはいかないんだよ。永遠に永遠に、いい？ 無限の彼方まで、無限の時間が経ったとしても、同じ君たちってというのは二度と現れないんだよ。同じあなたは現れない。たった一回きりのあなただ。

命懸けである、命懸けで生きろ、人はそれを何か堅苦しいことのように思う。そんなバカなことはない。命懸けで生きるって言ったら、これくらいシンプルで、これくらい当たり前で、これくらい朗らかな考え方はない。だって死ぬんだもの、君たち。もし死んだら君たちは二度と繰り返すことはないんだぞ。君たちは二度と今を繰り返すわけにはいかない。だからすべてを懸けるんだ。だから、すべてを、投げ出すんだ。

晴れた日と、暴風雨と、同じ空の違った表情に過ぎない。荒れた海と、静かな海と、同じ海の違った表情に過ぎない。ほら、俺がタバコの煙を吐いた音が聞こえる、君たちに。したがって、今当たり前な人間というのは、数えるほどもいない。彼らはいつでも鎧を着て何とかしようとしている。まだ生まれちゃいないんだ。が、君たちは君たちの悩み故に、生まれるチャンスを持っている。それが俺と君たちとの1万2千年前の約束だったね。あらゆる体の感じ、風の音、あらゆる思考、あらゆる思い、俺の声、肉体の感覚、注意を集中しようとするができないという考え方、そんなのどうでもいい。さあ、なりきれ。今になりきれ。俺に帰ってこい！ ここに帰ってこい！（沈黙）」

ダイジ「ちょっと前に、とても流行った。そしてそれは、結論は不条理とか徒労だとかいう。すべて人間がやることは徒労だっていうんだ。空しい努力だって。が、それは人間にとって本当に真実だ。もし嘘だと思ったら、自分が情熱をちょっとでも懸けられるものに向かって全力を投入したらいい。それでそれがうまく実現したときにすべて分かるだろう。人間の努力がすべて徒労であることが。

徒労でないものはただ一つだ。空を飛ぶ鳥を見よ。蔭く刈るあたわず。それにもかかわらず神は鳥を養っているではないか。社会とか、自分の使命とかってというのは、自我を安定させるための盾にすぎない。

地位、名声、金、低級な意味での愛情、それはみな自我を安定させるための盾だ。だからそれに行き着いたとしても、ちっとも心の底から『うん！』といえない。言えはしない。自我があると思って自我が頑張ってる限り、そんなことは、本当に心の底から絶対の満足を得ることなど決してない。でも人は、あれが何とか行ったら、満足があるんじゃないか、あれが何とか行ったら安らぎがあるんじゃないか。そうじゃない。安らぎは、君たちが捧げたところにある。すべてに向かって、命に向かって、君たちの命のすべてを捧げたところにある。」

ダイジ「さて、質問は？」

・「（不明）まだ教えてもらってないんですけど」

ダイジ「今でいい。それで、もうちょっと柔軟体操やって。こうやって前に倒れたときに完全に全部つくくらい。今無理があるのわかるでしょ。」

・「体を前に倒すとき、手を後ろにやったらだめなの？」

ダイジ「それよりも、それを考えないでひとりで。」

ダイジ「今、どうだ、冥想の具合？ 何か特にやりたいものない？ 冥想を別にして。」

・「仕事？」

ダイジ「どんなものでも。」

・「何がやりたいかはつきりしない。」

ダイジ「だったら冥想するしかない。それで、リラックスとかさ、神秘体験ていうか、とても恍

惚的な体験をもし得たいんならね、得たい？」

・「あるんなら得たい（笑い）」

ダイジ「でも何の意味もないよ？ そのときだけいい気持になって、後はなんていうことはないよ。」

・「それは冥想で行く？」

ダイジ「うん、チャクラへやれば起こるよ。」

・「そのへんは重点的にお願いします。」

ダイジ「やってみるか、チャクラ？」

・「一回やったんだよね、最初。」

ダイジ「まだ中途半端だった。じゃあ正式のを教えよう。」

・「（不明）やってるとき、意識を集中していると痛くなる感じがある」

ダイジ「それは力みすぎなんだ。あのね、恍惚の方のレベルに入るための冥想はね、徹底的にリラックス。TMの要領。」

B面

某「なんかさ、いろいろ楽しみたいっていうのがあってさ、そのために密教やれば楽しめるっていうのが分かる」

ダイジ「うーん、それは、楽しむ、浅い間は楽しめるっていうのはあるだろう。が深くなればなるほど困難になる、楽しむっていうのは。なぜなら、君が楽しみたいと思ってるっていうのはね、君自身ではないからだ。君が育った間に、テレビとかね、雑誌とか、そういうものによって植えつけられたものがほとんどだ。だから、浅い間は十分に楽しめる。が、深くなればなったほどね、困難になっていく。」

・「何が困難なの？」

ダイジ「生きていることが。そして、その深さっていうのが極限まで行ったとき、はじめて完璧に楽しめる。が、その間っていうのはもう、むしろ冥想なんかしなかったほうが、ずっと楽しめたのっていう時期がものすごく長い。そこで冥想院、冥想寺院といってもいいが、それが大切になってくる。なまじ悟り、見性っていうのを幾度かやるとね、かえって普通のひとよりもどうしようもなくなる。（沈黙）」

・「うんとね、その冥想寺院っていうのはさ、避難所みたいな感じで考えていいわけ？」

ダイジ「もちろん、どういう風に考えても構わない。ただ基本的にはね、それはある時期までは社交場でもあるが、なぜなら社交っていうのは君たちの精神健康にとってとても大切なことだ。君たちはあまりにも抜け駆けしたいと思すぎるがためにね、人と人との関係さえ満足にできない。だから社交場はおおいに必要だ。ただその前提は例外がただ一つもないということ。みんな同じなんだ。それさえわかっているれば、とても楽しい社交場になれる。ところが、君と俺とは違う、俺の方が一段階悟りが深いんだ、なんてやりだすから、おかしくなってくる。俺は恐怖を感じない、君は恐怖を感じてる、なんてふりをするから、いよいよやりづらくなってくる。みんな同じなんだ。一番最後の最後、すべてが終わったところに到達しない限り、人間は、どんなふうにもうまいことトリックを使って、厚い仮面を被ってても、みんな同じ穴のムジナだ。同じだけ不安に悩み、同じだけ内面では恐れ、そしてその違いと言ったらさ、うまく内面の不安や恐れをさ、だまかすことができるタイプの人間とさ、それができないタイプの人間との差にすぎない

。そんなの無意味だ。」

・「外部へのアピールっていうのは、どういう風に考える？」

ダイジ「それは考える必要ない。今必要なのはね、アメンティ冥想院っていうのを設立させるっていうことがまず第一に置いていい、目標として。そして俺は思うんだが、アメンティ冥想院っていうのは沖縄に置きたいと思う。だからそれまで貯金なりなんなりして、そして...あと、メデイテーション・インっていうのは、それぞれの、使える人のね、場所を借りてやってって。で、貯めた方がいいだろう。」

・「福生の方に持つっていうのは、支部っていう感じ？」

ダイジ「うん、支部っていう感じなんだが、もうちょっと自由に使えるように、もしできるんならば、何も持つ必要はない。金貯めた方がずっといい。なぜかっていうと、そんな簡単にかたがつくものじゃないからさ。」

ダイジ「で、君たちに本当に考えてもらいたい。君たちは色々なものが素敵だと思う。たとえばロックスターがバンバン音楽やってるのがものすごい目標だと思う。いやそれだけじゃない、女を自由にするのが目標、なんかすごく素敵なものに思えたりするかもしれん。あるいはなんか超能力使って...俺なんかアストラル・ポジションでしょっちゅう旅してるよ。君たちのところよく行くよ。俺の場合アストラル・ポジションっていうのはね、マニピュラ・チャクラから出ないんだ。サハスラーラから出るんだ。アストラル体がね。それで飛んでいく（笑い）。それでこんなことがあってさ、それで...まったく無意味だ。まったく、本質に何の関係もない。そんなもの、クレイジーな戯れにすぎない。ところがそんなもの目標に持っててさ、それでなんかすごく素敵なものだと思い込んで。だったら何でもいいから、桐山というあのバカ男のところに行って、滝に打たれて修行でも何でもして、ちょっとでも超能力出してみろよ。そしたら、超能力なんていくらあったってね、さっぱり自分の悩みが解決していないことが分かるよ。ところが、なんか意味があると思ってる。なんでもいいが、アメリカかタイかフィリピンのグラマーな女を抱けばさ、何かものすごく素敵な経験がそこに起こるんじゃないかなんて考える。やめてくれ。だったら抱いてみる（笑い）。」

ダイジ「うん、それで、その冥想院の活動っていうのに関わるんだが、もしね、そういうものに情熱、まだそこに何かあるんじゃないか、それをやったら何かあるんじゃないかと、それがまだ吹っ切れない人はね、それに向かって進めばいい。ところが進むことさえしなかったらどうしようもないじゃないか。え？ 一人で妄想かいてるだけじゃないか。それに向かって進むっていうのは、それをほんとに熱烈に欲望して、そしてそれを何としても達成しようとすることさ。でも、それも命がけだぜ？ 君たちはいつ死んでもいいくらいもうすでに生きてるんだから。なぜか？ だってそうじゃないか、こんなもん、ハイデガーっていう、あの程度の哲学者だってさ、明瞭に言ってるじゃないか。人間っていうのは生まれた瞬間すでに死ぬのに十分だけ生きてると。当たり前の話じゃないか。君たちが生きているそのことが死ぬに十分だってことさ。そして、もう一度言おう、永遠に永遠に永遠に永遠にこの宇宙が生まれ変わり死に変わり生まれ変わり死に変わり生まれ変わり死に変わりしたとしても、君たちがもう一度現れるってことは絶対にはないんだ。ただ一回きりを君たちは生きているんだ。で、君たちは何か実験したいと思う。この世に実験なんかありゃしない。君たちは何かを試したいと思う。この世に試すなんてことはありゃしない。みんな真実だ。もしそれに全力をかけなけりゃさ、死んでから閻魔大王に飯代を請求されるよ。」

ダイジ「それから、もう一つ、これははっきり言うておくがね、もし君たちが色情修行とかセックスとかいうものに興味持ってそれに乗り出すんだったら、本当に自分が心から愛して、もしこの女となら永遠にでも一緒にいてもいいと思う女を選びなさい。そしてその女が死にたいと思ったら直ちに自分も一緒に死んであげるくらいに愛せる女を選びなさい。もしそういう気持ちでなくて、色情修行したらね、まったく無意味なエネルギーを浪費して、何にも実現しないで終わるだろう。プレイボーイっていうのはさ、なんかあっちの女、こっちの女、手に入れたらさ、なんかハッピーだっていう顔してるわけよ。ハッピーであるものか。だったらプレイボーイになるように頑張ったらいい。もしそれに魅力を感じるんだったら。」

ダイジ「いい？ 人はね、自分自身、一人がね、あまりにも空しいからね、その穴埋めにいろいろなことをでっち上げるのさ。総理大臣になろう、実業家になろう、素晴らしい音楽家になろう、プレイボーイになろう、ところが肝心の自分自身の空しさっていうのは一向に解決がついていない。だから一時的には、なんかうまくいったって喜びがある。が、しばらく経つとそれは全部ぼっしやけちゃう。まだ同じ問題の繰り返しだ。君たちという、その君たちの自意識がある限り、何をやったとしても最終的な結論は、絶望だ。これはひどい言い方かもしれないが、この人生の真実だ。君は飛行船に憧れた。一生懸命やった。それで？」

・「...墜落した」(笑い)

ダイジ「ところが人はさ、自意識に直面して自意識の問題を片づけるっていうことを最高に恐れている。だからいろんな目標を作る。やれ定力をつけたら何とかなる、やれエネルギーに満ちたら何とかなる、やれドラッグを飲んで、こうなったら何とかなる、やれなんかすごいグラマーな美人を抱いたら何とかなる、やれ素敵なスポーツカーかベンツでも手に入れて運転したら何とかなる、やれ金をいっぱい貯めて、何一つ不自由のない生活をして、大邸宅に住めば何とかなる、...何ものやしない。が、多くの人たちは全然、苦しんでないように見える。苦しんでないことはない。心の底では君たちとまったく同じ問題を抱えている。まったく同じ問題を。ただどこが違うかという、君たちよりもうまく仮面を被ることに長けただけだ。それが上手になっただけだ。ところが、本当にひとりきりになってみる。もう何一つ通用しない。たとえばヘミングウェイだ。大文豪だ。ものすごい賞賛を博した。そして、今日はキリマンジャロ、明日はバミューダかなんかでカジカ釣りをやる。おおダイナミックだ、あれこそ男の中の男、成功した男だなんてやってる。ところが奴さん、夜ひとりきりになったら、電気消して寝られない。おっかないんだ。部屋中の電気消して寝たことないんだよ、一度も、ヘミングウェイは！ だから奴さん、最後に何をやった？ 猟銃、それも象打ちの猟銃だ、それを口にはさんで、足を持って、自殺した。ダーン！ って。上顎全部吹っ飛んじやった。なんでせつかく最高に生きられる命を与えられているのにそれを発見しないで終わっちゃうんだ？ 最高に生きられる命、それはね、自分の命を全身全霊でもって捧げること。そして、それが愛だ。そこに行きつかない限り、君たちは何をやったとしても決して安心することはないだろう。明日になったら安心する、明後日になったら安心する、あれをやったら安心する、そんなこと考えるな。あれが実現できたら俺はハッピーになる、そんなことあるもんか。だったら実現したらいい。まったく新しい問題がそこに起こる。そうではない、今から始めなさい。今始めるんだ。今その中にいるんだ。今、愛そのものの中に委ねるんだ、すべてを。大実業家が成功する。そして女を金で買う。そう、グラマーかなんか、外見はすごくいいのを買うだろう。が、その中で何一つ自分の一番心の中心に触れる喜びというのは起こらない。で、奴さん考え込む。ああ、俺は何をやったのか。そして死んでいく。そしてそんな奴はさ、生まれ変わったらさ、そのカルマをそのまましよい込む。」

ダイジ「そして、情熱っていうのを、本当に当たり前に考えてごらん。情熱を注ぐべき対象って

いうものをもし、本当に素直に考えたらばね、二つしかない。それは、運命的な出会いによって、これがすべてだと本当に言い切れた場合。それはもちろん悟りとは別のことだ。たとえば、音楽に出会えた、音楽のためなら死んでもいい。素敵な男に出会えた、その男のためなら死んでもいい。あるいは、とても可愛らしい子供を産んだ、この子供のためなら死んでもいい。そのとき、その人たちっていうのは、まったく人と比較する必要のない充実の中に生きている。ちょうど、船の船長さんがね、自分の船に愛情をかけたとき、その船が沈むっていうときにはさ、船と一緒に沈むよ。それが一つ。そしてもう一つはね、君たちの自我がある限り、何をやったとしても、君たちの自意識があると妄想している限り、何をやったとしても、何一つ、本当の安心も本当の満足もありはしない、っていうことを自覚したときにね、冥想の道に入ってくることだ。そして、冥想とは何かっていったらね、これは人間が作り出したものではないんだ。宇宙が創り出した一種のバランス、バランス機構なんだ。そして、それがあつために、人間は、完全にシツチャカメツチャカにならないですむ。なぜなら、誰でも、ただ一人の例外もなく、君たちが今持っている問題とまったく同じ問題を持っている。君たちが今持っている不安とまったく同じ不安を持っているんだ。総理大臣だろうと、国際連合の総長だろうと何だろうと、例外はない。そして今の冥想ブーム、これはいけない。冥想が起こったことはいい。が、冥想っていうのがさ、まるで自我を防御するための道具に使われちまつてる。そんなことしてたら、いつまで経つたてきりがないだろう？　それが超能力を得て人の心を見抜くとか、超能力を得て金をうまく儲けるとか、超能力を得て女をものにするとか、そんなことやっても、やることはできるよ、もちろん。それは一つの能力だ。が、そんなことやって後に何が残るわけ？　君たちの一人ぼっちの空虚さは相変わらず一人ぼっちの空虚さだ。だから、それゆえにはつきり言っておく。君たちが愛に目覚めない限り、君たちが自分の自我から解放されない限り、君たちは一度も生きることはない。そう、ちょっと前の時代ではさ、まるで悟りとかなんとかっていうのを問題にするのはさ、もう年老いた、人生が終わった人たちだと思つてた。が、そうじゃないんだ。自分のすべてを、この、なんだ、この濁り酒のために、自分の命のすべてを捧げない限りね、君たちに、決して本当の満足、本当の快樂、本当の喜び、本当のすべてはない。で、僕の今話してることがね、なんか胡散臭いか信じられないんだつたらね、可能性のある方向に向かつてもっと頑張つたらいい。その代り多分、非常に残念なことだが、その可能性に向けて頑張つたときに、それをうまく達成できたとしたらね、そのとき空しさがそこにあるっていうことに気付いたとしても、それに対して真剣に対処するエネルギーはもうなくなつていようだろう。それが、冥想院が絶対的に必要な理由だ。そしてそれは大きくなるためにあるんでもない。新興宗教をつくるためにあるんでもない。君が、君自身の内面の、一番最後の答えを発見するためにあるんだ。慈悲を、慈愛を、愛を、真心を、自分を超えた、本当にさわやかで自由な、そして海のように計り知れない、深い、喜びと、悲しみを味わうために。そのとき君は決して、あの、おしっこしたときにね、おしっこをさ、10分の1とか3分の1とか残すようなおしっこの仕方は絶対にしない。おしっこするとき全部出すだろう？　ところが君たちときたら、どうだ、何かやるのでもいつでも残つてる、なんか一部。本当に全面的にそれに直面しない。そして、命懸けであれつていう、それがえらく何かさ、非常識なことのように聞こえる。あるいは突つ張つた言葉に聞こえる。何をやるにも命懸けでやりなさいって。ところが、これくらいシンプルで当たり前の話つてないぜ？　なぜなら君たちいつでも死ぬに十分なだけいるんだぜ？　明日死ぬかもしれん、1分後に死ぬかもしれん。そして、君たちがもし死んだら、二度とないんだぜ？！　君たちは、二度と！　たった1回きりの君たちだ。もちろん転生はするよ。で、転生して生まれ変わったつて、それはもう今の君たちじゃない。」

・「でもそのときに意識は残つてるんじゃないの？」

ダイジ「そんなもの、全面的に意味ないよ。（笑い）今日は究極講座ですから。」

・「そのときにはもう、何をやるっていう、一つのパターンではないわけなの？」

ダイジ「ああ、抜けた場合？ 抜けた場合はもう、どんな言葉言っても、もう、当たらない。ただ充実しているっていうこと。ただ生きることが生きているということ。そしてそれはもう説明できない、だから俺はさ、宇宙全部の喜びに達しても、まだそれには当たらない。宇宙全部の悲しみに達してもまだ、それには当たらない、っていうしかない。それはもう本当に言語を絶している。信じられない。だから俺を見てください。それぐらいしか言うことはできない。」（沈黙）

ダイジ「それで君たちときたら、どっか山奥の静寂な地で、グルに出会うなど思っている。本かなんか読んで。やめてくれ！ ここにグルがいる！」（沈黙）

ダイジ「ほかに、質問は？ （沈黙） あるだろう？ いくらでも！（笑い）俺はさ、正直言えば、何一つ話すことなんか無いんだ。はっきり言っちゃえば。」

・「で、確かにさ、それでもう、なんていうか、それでそうなんだけど、どうすればいいの？」

ダイジ「（笑い）どうすればいいって聞いた瞬間さ、その、あの一、実在といってもいいし、完璧な喜びといってもいいし、それから外れちゃうんだ。」

・「でもさ、でもやっぱり...」

ダイジ「君がね、いつも引っかかるのはね、結論を出してから何かをやらうとすることだ。...道場行きやあ、ちゃんと理路整然とやってくれるだろうよ。そりゃあどっかの新興宗教行きやあさ、いろんな教義説明してさ、君たちを安心させてくれるだろうよ。たとえばさ、ダイジ、これはグルである。したがって、ダイジの言うことをそのまま聞いていれば、あなたたちは救われる。こんな簡単なことはないよ。そして、人は神の宮である。神の子、神の宮である。だからお互いに愛しなさい。そうすりゃ、それで結論がついたように思う。ところが、本当の、本当の、本当の自分の中心じゃ、ちっとも結論はついていない。だから、四六時中それをやってないと気が済まない。四六時中それを考えていないと安心できない。まるで麻薬中毒だ。そうじゃない、もともとあるんだ。すべてが。君たちの恐れっていうのが一体何かって言ったらね、一つはすべてを受け入れたくないってところから来る。どうしても自分ていうものをさ、他と分離したいと思っている。そして、すべてを受け入れてさ、すべてと一体になったらさ、今度はさ、本当に自分が愛してると思える人との関係さえなくなっちゃうと思っている。ところがそれはまったく逆だ。君たちがまず第一に、神を全身全霊で愛することを知ればね、その時初めて、自分が一番惚れている人間ていうのを、本当に惚れることができる。（沈黙）他に質問は？ Wは？」

W「うーん...いや、ダイジが来るとね、相当に混乱させられるっていうか...」

ダイジ「うん、もちろん。Wはね、一つの理論、つまり知的な理論、しかもそれは非常に困ったことにね、それは知的ではないということを踏まえた知的理論を、作り上げちゃったからさ。だから俺が言ったろ？ 君はここで愛に触れたって。ところが君はそれを疑いだしたって。ところが君本人としては、一向自分は疑っているという気持ちはない。それを信奉しているように思っている。ところがまさに、その信奉しなくちゃならないということが疑いじゃないか？」

W「・・・」

ダイジ「僕は君の誠意、全誠意に対して話している、今。だって愛に触れた人間が一体、愛とかさ、神とかっていうことをさ、そんなにガチガチガチガチさ、信奉したり信頼したりさ、愛がそれについて思索する必要があるかよ？ それは疑い以外の何物でもないじゃないか。

・・・で、君たちの最終到達点って言ったらいいか、あるいは今いる状況、本当に今ある状況っていったらいいか、それが悟りなんだが、その方向を間違えてもらいたくないから、はっきり言うておくれがね、すべてがいいということ。すべてが完璧だということ。そのすべてってというのは、これと、あの座布団と、この塵と、君と、それが全部同じ、たった一つのものだ、たった一つの私だということだ。それが<今>であり、それが到達点だ。そんなことが分かって何になるの、なんて質問しないでほしい。それが分かったらすべてが手に入る。」

ダイジ「たとえば宗教。今みたいに瞑想がブームで瞑想がテクニックみたいなこと言われると俺は、かえって宗教をもっと信奉しろとか信仰しろと言いたくなる。それは当然のバランスだ。あまりにも宗教から離れちゃった、瞑想が。が、その宗教にしてからがさ、実は余計なものにすぎない。皆同じなんだ、僕たちは。そして皆同じだけね、自分の中に限りない神秘を宿している。君の中にも。残念だが、君に届かないことがとてもつらい。でも届く日が来るだろう。（沈黙）（笑い）誤解しないで、たとえば愛っていう、愛っていうのは、すべてのものに対する愛だ、もちろん。が、すべてに対する愛っていうのを理屈抜きで感じたとき、たとえば、ミルクキーがさ、この前のメディテーション・インで涙を流した時、愛に触れていた。そしてその愛に触れたとき、初めてね、自分の個性が惚れているものを一番愛することができる。愛とは売春婦になるというような類のものではない。愛っていうものに触れたとき初めて順番が分かる。何が一番自分にとって大切か。その次は何か。味噌も糞も一緒には決してならない。味噌は味噌壺へ、糞はトイレへ。」

ダイジ「超人ハンドブック持ってきたっけな？ えーと、ああ、君がいいや。これをね、この中のさ、一節ずつ分かれてるから、適当に開いて、読んで、みんなでき、もしよかったら、議論してほしい。反対の人いる？ よし、それじゃ、やってほしい。そして自由に、いい？ 忘れないでほしい、みんな同じなんだ。世界中すべての人が、みんな同じ問題を抱えてるんだ。ただその違いはね、自分をだますことがうまいか、うまくないか、それだけの違いだ。で、ここではだます必要がない。いい？ よし。」

（女性）「月並みな言葉だが、ねえあんた、愛は愛を愛している。」

・「もう一度読んでくれない？」

（女性）「月並みな言葉だが、ねえあんた、愛は愛を愛している。」

・「なんというのかな、言葉を言葉として理解したらさ...言葉としてしか理解できないような気がする。全くその通りだと思う。それ以外に言いようがない。」

・「全然意味が分からん。」

（沈黙）

ダイジ「何？ 今の。」

（女性）「月並みな言葉だが、愛は愛を愛している。」

ダイジ「よし、これについてあなた方の中で議論してほしい。自分の考えを。」

・「ダイジも入って。」

ダイジ「うん、俺は入っても入らなくてもいい。が、君たちにはやってほしい。」

W「それでいいと思うんだよね。論理としては。ダイジの話聞いてると、そうだなって気がする。ただ、その実体をさ、どうしても感じられない。」

ダイジ「うん。」

・「やっぱり、過去、現在・・・」

ダイジ「で、ほら、愛が愛を...一体どうなるの？」

・「あの、知的に言えばね、愛しかないっていうのを説明しようとしてるということだと思うんだ。」

ダイジ「ああ、愛しかない。これは非常に決まっているな。(笑い)なんか俺もそんな感じがするよ。(笑い)しかし、そうなったらさ、いろんな人たちのさ、個人的な関係ってどうなっちゃうんだろう？なんかさ、まるですべてが愛だなんつったらさ、個人的な関係もさ、個人的な好みもさ、全部へったくれもなくなっちゃうよ。そうなの？おっかない。(笑い)僕は僕の好きな彼女と別れたくないしさ、僕は僕の好きな趣味を止めたくないしさ、僕は、太陽が輝いている海の中で真っ裸で飛び込むのが大好きだから、あれもやめたくない。」

・「それはそうなんじゃない？」

ダイジ「さあ、全力で考えてほしい。考えるんだ。思考するんだ。君たちの今までに陥って反対方向に行ったポイントの一つはね、一番肝心なことを率直に考えるってことを飛ばしちまったことだ。そして今俺は、君たちに愛のバイブレーションっていうのを送りたくない。愛のバイブレーション送ったらそのとき君たちはさ、みんな泣き出すかさ、みんな、高揚感を味わうだろ？

が、その高揚感だけじゃ済まない。知と愛っていうのは、バランスが取れて初めて本物だ。愛は知を含む。智慧は愛を含む。そうですね、先生？」

ミルキー「はい。(笑い)」

W「やっぱりね、得意の論理的思考に行っちゃうんだけどさ、『愛が愛を愛している』の主体の愛があるじゃない？それと目的語の愛と、行為の愛があるよね。その三つの関係ってのを考えちゃうんだよね。それが別物かとか同じものかとか、一応議論的にいうと分けるよね。」

・「要するに愛は愛を、ってのは自我っていうことじゃない？人間て言ってもいい。」

ダイジ「さあどうだろう。W。あんなに俺と会わなかった間に勉強した男がどうした。」

W「だって、僕のやってることをいつも無意味だ、無意味だ、って言ってるんでしょ？」

ダイジ「何が？」

W「だから知的な・・・」

ダイジ「いや、最終的に無意味だってことは何一つないんじゃない？ 人間、それも、ものすごく極限に接近しているんだけどさ、無意味だっていうことと意味があるっていうことを分ける、そのことが人間が超えなくちゃならない最後のトリックなんだ。そんなんだったら真剣にね、何か行を、もしこれから順調にいつて冥想院ができたならば、行をやらせるけどね、そんなんだったらね、そうねー、五時間も冥想続けたらね、冥想に一体何の意味があるか、ってすぐ起こるよ。一体何で俺はこんなことやってなくちゃならないんだ。で、ドンファン流にこれを言えばさ、呪術師の道に踏み込む者っていうのはさ、仕方なく入った奴だけがものになる。すすんで呪術師の道に入った奴なんてのは、絶対ものにならんと。つまり、すすんで呪術師の道を歩もうとした人間っていうのはさ、意義を最初から当て込んでるだろ？」

W「でも、みんなそうなんじゃない？」

ダイジ「いや、一番ストレートに入るのはね、出発点でもってね、何一つ積極的な願いが無いっていう場合に、一番ストレートに入る。極限まで行く。つまり、そこにはスケベ根性ってのがまったくないから。たとえば、俺はさ、本当に好きな女がいた。そして彼女と結婚して子供を作った。そしてそれがすべてだった。ところがある日、女房も子供も、交通事故か何かで死んでしまった。そして俺はもう、何一つやる事がなかった。そのとき、ある不思議な縁があった場合に、本当に早くストレートに人間になることができる。超人になることができる。」

・「あの一、よく言ってる情熱っていうのはその場合全然関係ないの？」

ダイジ「ううん、その場合に情熱っていうのはさ、女房子供を愛してた情熱っていうのはさ、動機のある、目的のある情熱でしょ？ ところが、それが取り払われたときにさ、情熱のない人はそこで多分気が狂うか自殺するか、廃人になってしまうだろう。が、その情熱が十分に蓄えられていればね、最愛の女房と最愛の子供、それがすべてであるということ、がなくなった瞬間にさ、動機とか目的を持たない情熱だけがそこに残るんだ。」

・「普通、プロセスを言う場合は、どうしても動機づけられた情熱っていう感じになるの？」

ダイジ「人間のやる場合ってのはさ、99.9999%目的のある情熱だ。そしてそれから入るのももちろん正しい。本気で入るならね。その場合にはどういう形で起こるかっていうと、前世でおそらくそれに相当するものを経験したということだろう。」

・「じゃあ目的のない情熱っていうのは意外と大切なものなの？」

ダイジ「意外と大切じゃなくて、それが唯一の原動力だ。」

・「前世でそういう因縁がない場合は、どうしようもないっていうことになる？」

ダイジ「いや、そんなことはない。俺に会ったからには。」

・「前世でさ、目的のある情熱ってのを持ってたから？ それがどうなるわけ？」

ダイジ「たとえば前世で音楽家がいるとするだろ。その音楽に命懸けだったとするだろ。ところが死ぬ間際に音楽の無意味さっていうのをことごとく見切ったとするじゃない。そういう時が来る。芸術にはそういう側面があるんだ。」

・「見切るっていうのは、全部やりつくすってこと？」

ダイジ「うん、やりつくす。本当に愛しきったってこと。その瞬間、音楽が決して自分の解放に導かないで、自分がある形の中でがちりと固めたにすぎなかったっていうことに気付くんだ。」

・「そういうことが前世であった場合は・・・」

ダイジ「あった場合は、生まれたときに、思春期になった頃から、猛烈に何か遥かなるものを求め始める。今度は音楽でじゃない。」

・「前世でそういう目的のある情熱をやった場合はさ、もうやらないわけ？ 分かっちゃってるから。」

ダイジ「うん、それが極限まで行った場合にはやらない。たとえば岡潔っていう数学者いるだろ？ なかなかできた人物なんだがね、彼はこういう風に言っている。彼は南無阿弥陀仏ばかり唱えているんだ、朝から晩まで。数学者のくせに。その彼がこう言ってる。この次生まれ変わったら何になるか人に聞かれて、俺は絶対数学者になんかならん、南無阿弥陀仏の坊主になると。」

・「あの、月っていうのが分からなくて、太陽と月と地球の関係で、太陽と地球だけだったらわかるんだ。でも、月っていうのがあって、太陽と月の関係がよくわからない。月は干潮満潮を起こすでしょ、で、月っていうのは欠けたりするでしょ。でそれが太陽の沈んでいくときと上っていく（以下意味不明）。で、さつき月並みっていうのが妙にひっかかって。」

ダイジ「月っていうのはね、音楽の中に入るのではなくてね、音楽の外と音楽の中に共通して流れている一種のバイブレーションを示している。太陽は違う。太陽は音楽の中心だ。共通したバイブレーションっていうのは、お茶を飲んだりさ、音楽を演奏していないとき、そういうあらゆるときに流れているある一つの想い。地球は音楽それ自体のメカニズム。テクニクって言ってもいい。だから月っていうのは、音楽家が他の時間に何をしてたかっていうことに関わる。」

ダイジ「月っていうのはさ、簡単に言えば君が素敵な女の人に出会ってね、一緒に紅茶飲んだとするだろ。あるいはさ、ある日、海を見にどっか行ったとするだろ。そういうときに感じだバイブレーションっていうのが、そのまま音楽に反映するっていう、そういうことさ。ものすごく曖昧な自覚できない形で働いている。」

・「太陽の音と月の音っていうのがあってさ・・・」

ダイジ「月の音っていうのは捉えられない変化だ。つまり君が同じ演奏しようとしてもね、その時々によって二度と同じ演奏っていうのはできない。同じ演奏をどんなにしようとしても絶対

にできない。」

- ・「男が太陽で女が月って見ることもできるわけでしょ。」

ダイジ「もちろんできるよ。」

- ・「その場合、男の方が女より1オクターブ低い？ そのときチャクラの場合（意味不明）」

ダイジ「いや、男の声っていうのは腹の声だ。」

テープ終了

青梅1980

<http://p.booklog.jp/book/98207>

著者 : dantesdaiji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/dantesdaiji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98207>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98207>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ